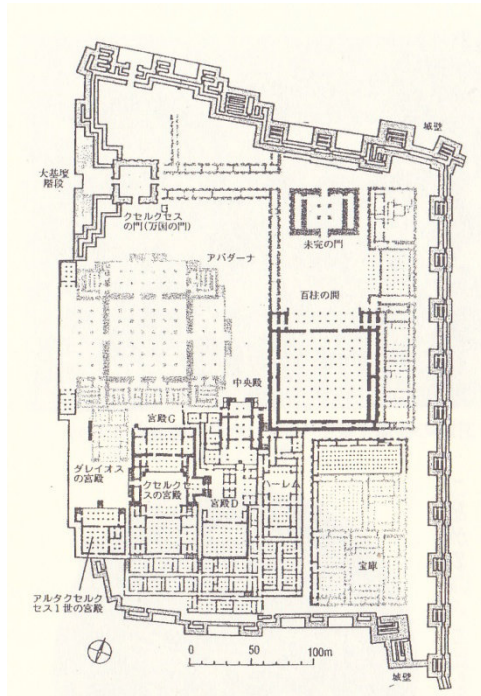


ペルシア・クリルタイ運動

ペルセポリス宮殿図



大帝国に発展したペルシア

古代からペルシアと日本のつながりは深い。ペルシアから陸のシルクロード（ステップ・シルクロード、オアシス・シルクロード）、あるいは海のシルクロードを通じて、さまざまな交流、交易がなされてきた。

紀元前五二五年には、アケメネス朝ペルシアのダリウス一世が、イラン高原のペルセポリスを中心にオリエントを統一する。ダリウスは各地に舗装された「古代の帝王の道」を建設していった。西は小アジアからギリシアへ、東は中央アジアへのルート、北西インドへのルートが伸びていた。彼は陸だけでなく、ナイル河と紅海をつなぐ運河を通して、エジプトからインド洋を貫き、インダス河の航路も開いている。それらはペルシアの支配を貫徹する道路、航路であっただけでなく、通商の道でもあり、文化の道でもあり、宗教の道でもあった。

ダリウス一世の帝国拡大によって、インドのインダス川流域もペルシアの支配下になった。「王の道」はペルセポリスからこの地域にも伸長した。言語や貨幣や建築や行政にも、ペルシアの様式が採用されるようになる。



牛を殺すミトラ神（『ミトラの密儀』より）

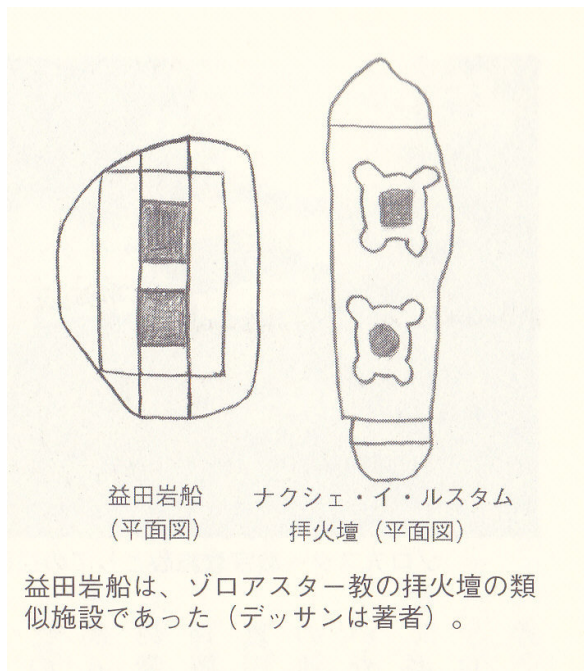
最初の国際宗教となったミトラ教

最初の国際宗教といわれるミトラ教は、アケメネス朝ペルシアやササン朝ペルシア、アルメニア、アナトリア、さらにはローマ帝国やその植民地などにも深く浸透した。ペルシア人の若者たちは、真実と正義の規範をミトラに学んだとされる。ペルシア帝国でも、ミトラ教は、重要な位置を占めていた。

ミトラはもともとアーリア系遊牧民の神であり、ヒンズー教、ゾロアスター教の中でも崇拜された、極めて古い信仰である。ミトラ神は「真実の神」「救済の神」「浄福を与える神」「戦士」「勝利者」とも呼ばれた。それは最高神、一神教に近い存在であった。

ローマ帝国時代は、植民地の各地にもギリシア語で書かれた碑文が建てられ、ゼウス、ヘリオスとともにミトラの神名が刻まれた。アレキサンダー帝国とそれに続くヘレニズム王朝の時代は、ギリシア多神教とミトラ教の時代になった。ペルシア帝国でもゾロアスター教とともに、ミトラ教は重要な信仰の柱になった。

ミトラの「友愛の神」としての性格は、仏教では「慈愛の仏」、キリスト教では「博愛の神」として受け継がれた。ミトラの「救済の神」としての性格は、仏教では「救世菩薩」、キリスト教では「救世主」として受け継がれたといってもよいだろう。



ゾロアスター教の起源と伝播

ゾロアスター教は、紀元前七世紀（紀元前一二世紀という説もある）、イラン高原でゾロアスターが、天測、正義、公正の神であるアフラ・マズダから啓示を受け、創始したとされる宗教で、民族宗教から国際宗教にまで発展する。

世界の創造主、全能者たる最高神アフラ・マズダの存在、善神アフラ・マズダと悪神アングラ・マイニュの対立、死後の審判と天国の存在、世界の終末と救世主アフラ・マズダによる救済などを唱えている。ゾロアスターが神から啓示を受けて記したとされる経典が『アヴェスタ』と呼ばれる。

ゾロアスター教は、ミトラ教より後代に発生した宗教であり、ミトラの「光の神」「救済者」という側面を引き継いだと考えられる。ゾロアスター教にミトラ教が共存している場合があるが、それはゾロアスター教がミトラ神を取り込んだからである。

ゾロアスター教は、紀元前七世紀から紀元前四世紀まで続いたアケメネス朝ペルシアで、王族の信仰を受けて公式宗教になり、ササン朝（三世紀から七世紀）もまた、ゾロアスター教を公式宗教として尊重した。

ゾロアスターの信仰は、ペルシアへのアレキサンダー大王の侵攻、ヘレニズム国家の建設によっても揺らぐことなく継承され、シルクロードを通して、中央アジアから中国、インド、日本へも伝わった。特に、ゾロアスター教を国教としていたササン朝ペルシアが滅亡すると、ゾロアスター教徒のペルシア人が、王族を含めて大挙して入唐した。



皇極天皇・斉明天皇

斉明天皇はペルシアの宮都を再現しようとした

ペルシア人の建築技術者を積極的に採用した当時の大王である蘇我馬子と斉明天皇は、飛鳥宮などにおいて、ペルシアのゾロアスター教の神殿とゾロアスター教の宮殿を飛鳥の地で再現しようとしたと考えられる。

飛鳥時代の宮殿、宮都では、建物の床面や通路や溝などに川原石が使われ、道路、広場、園池などにも石が使われた。飛鳥宮から二万平方メートルにも及ぶ石敷きの広場が発掘されている。これは古代ペルシア帝国の都、ペルセポリスの石敷きと類似している。

斉明時代の飛鳥宮も、宮殿、神殿（飛鳥寺）、王墓（古墳）、庭園、倉庫を比較するとペルセポリスと酷似している。両者の共通項は、全体が塀で囲まれ、幾つかの門から出入りし、宮殿の内部は石敷の通路で連絡され、王の間があり、政務を司る間があり、兵舎や倉庫や宝庫があったと推察できる。

ペルセポリスのアパダナ宮殿の階段には、天皇家の菊花紋そっくりの一二花卉の蓮連文と王の守護者たる獅子像が刻まれている。この紋は飛鳥京にある主な寺院の軒丸瓦と酷似している。

ペルセポリスの宮殿には柱頭装飾としてグリフィンのほかに牡牛、獅子、人面、蓮華などが飾られていたが、それが飛鳥京では「猿石」とよばれる石像にあたるのだろうか。「猿石」の中には、猿に似たユーモラスなものもあるが、牡牛や獅子や人面を表したような奇怪なものもあり、人面の中にはペルシア人風の豊かな巻き毛のあごひげのあるものもある。西域の匂いがただよう。ペルセポリスでも飛鳥でも石像はどちらも背中合わせの双頭になっているものが多い。



飛鳥資料館にある石人男女像。
ペルシャ人の風貌そのもの。噴
水機能がある。



二面石の石像

飛鳥文化の中のペルシア

これらの石の遺跡の特徴を挙げてみよう。どうも古代ペルシアの匂いが濃厚である。石造物には、何の目的で作製したか、わからないものが多い。儀式や饗応の目的で造られたとか、宗教施設として造られたとか類推されるが、むしろ、ゾロアスター教で理解したほうがわかりやすい場合が多い。

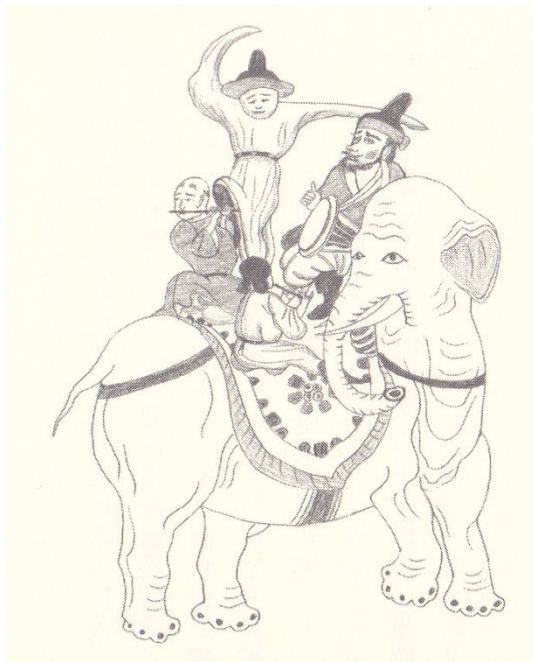
二面石について、善悪両面を表すというのは、ゾロアスター教の善神アフラ・マズダーと悪神アングラ・マイニユの戦いに関連あるのではないか。

二面石などのように飛鳥時代の条理の境界、河川の河原の境界に設けられているものが多い。宮殿と外界との境界、この世とあの世との境界を表したもののなか。ゾロアスター教の現世と霊魂の世界と理解できる。これらはゾロアスター教の宗教施設か、蘇我氏豪族の庭園に置かれるために造られたと考えられる。

二面石にも内部に水を通す空洞があり、小さな孔から噴水のように水が外に出るようになっている。そしてこれらの像に常時水が流れるように水槽や石組みの溝が造られていただろう。石だけでなく、水にこだわるペルシア系渡来人、蘇我氏が造らせたものであろう。

亀石、二面石などのように作りかけで、未完成とみられるものが多いが、ペルシア系渡来人の風貌を思わせるものが多い。

益田岩船や石垣遺構のように長さにして十数メートル、数百メートル、重さにして数百トン、数千トンにも達する巨大な遺跡もあり、ペルシア人などの専門の技術者集団の関与が濃厚である。彼らは共通の技術、共通の工具によって、これらさまざまな石造物を加工しているが、これほど集中して見られるのは国内の他の地域にはない。



象の上のペルシア人像

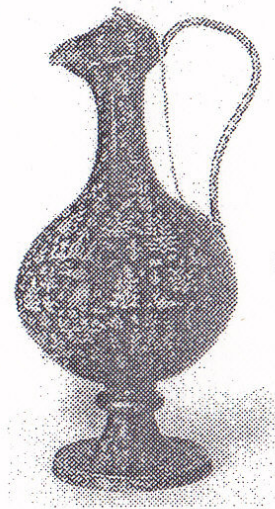
奈良時代におけるペルシア

日本とペルシアの交流関係は、シルクロードを通じて意外と古く、濃密である。ペルシアはアッシリア帝国、新バビロニア王国、ササン朝ペルシアなどが支配していたが、ササン朝の支配領域は、イラン高原を中心に、メソポタミアの一部、中央アジアの一部、東ローマ帝国やインダス河の流れるインドの国境にまで達し、陸と海のシルクロードを支配、中国や日本との交易も盛んになった。

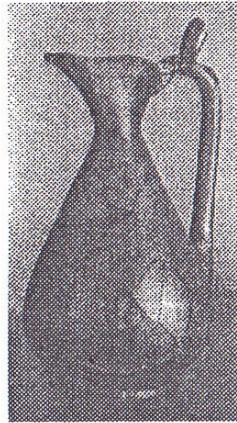
奈良時代には、李密を中心としたペルシア人などの一行が、奈良を訪れて、朝廷から位を受けている。李は医者ではないか、あるいは楽人ではないかともいわれ、このときペルシアの伎楽なども伝わっている。正倉院の宝物に見られるように、ペルシアからはガラス製品、陶器、金銀細工、白瑠璃碗、四弦琵琶、香料、薬品、織物、珍獣のほか、羊、葡萄、瓜、なつめ、ざくろ、いちじくなどがもたらされたと考えられる。また、ペルシアから金銀細工、装身具、織物、ガラス器などを製作する職人も、インドや中国や朝鮮や日本に進出した。

白瑠璃碗（はくるりわん）は、大仏開眼会に正倉院に収められた淡褐色のカットグラス杯で、ササン朝ペルシアの工房で多数出土しているため、そこが起源とされている。

漆胡瓶（ぬりのこへい）は、鹿、羊、鳥、蝶、草花などが描かれた鳥頭形の口をもったペルシア風の水瓶で、漆塗りが施されている。ササン朝の銀製水差し、唐朝の陶製の水差しと形がそっくりである。



奈良東大寺正倉院の漆胡瓶



ササン朝ペルシヤのガラス水瓶

正倉院のペルシア文化

正倉院の宝物の中にペルシア風の工芸品が多い理由はなぜなのか。六五一年にササン朝はサラセン帝国ウマイヤ朝によって滅亡し、その王子ベーローズは唐の長安に亡命、高宗皇帝からササン朝のゾロアスター教寺院を建てることが認められた。

ベーローズだけでなく、多くのペルシアの王侯貴族、家臣、祭司、楽人、工芸家、商人が遺民となって長安に流入し、唐朝は文化、交易の円滑化政策も行っている。ペルシアの金銀などの器、メノウや玉などの宝石、さらにはペルシアのフェルト、絨毯（じゅうたん）、貨幣なども流入し、ペルシアの音楽、舞踊、衣装、風俗が流行した。

長安の工房でペルシア風の工芸品が製作され、それらの一部が遣唐使や商人によって、日本にもたらされた、あるいはそれらの技術が日本に流入し、それを模倣した日本の工人によって製作されたものもあると考えられる。



皇極天皇・斉明天皇

『日之本文書』の中のペルシア

『日之本文書』には、ユーラシア、ペルシアについて、次のように述べている。

「ユーラシアは波斯（スキタイ）国、波紫（ペルシア）国とも別称される。さらには、波嘶（ギリシア）、波刺流（シュメール）、波刺斯（トルコ）、波囉悉（エジプト）などをいう。紅毛人国、黒人国、黄人国をも含む。日之本国はユーラシアを知らずして太古の先祖の故事をえることは難しい。時代が移ろえば、世界は変わり、民族の入れ替わりがあり、戦いで廃墟となることもあって、歴史の故事は留めがたい。よってユーラシアとして総称するものである」

『日之本文書』は、ナーダムの祭典について、詳しく述べている。

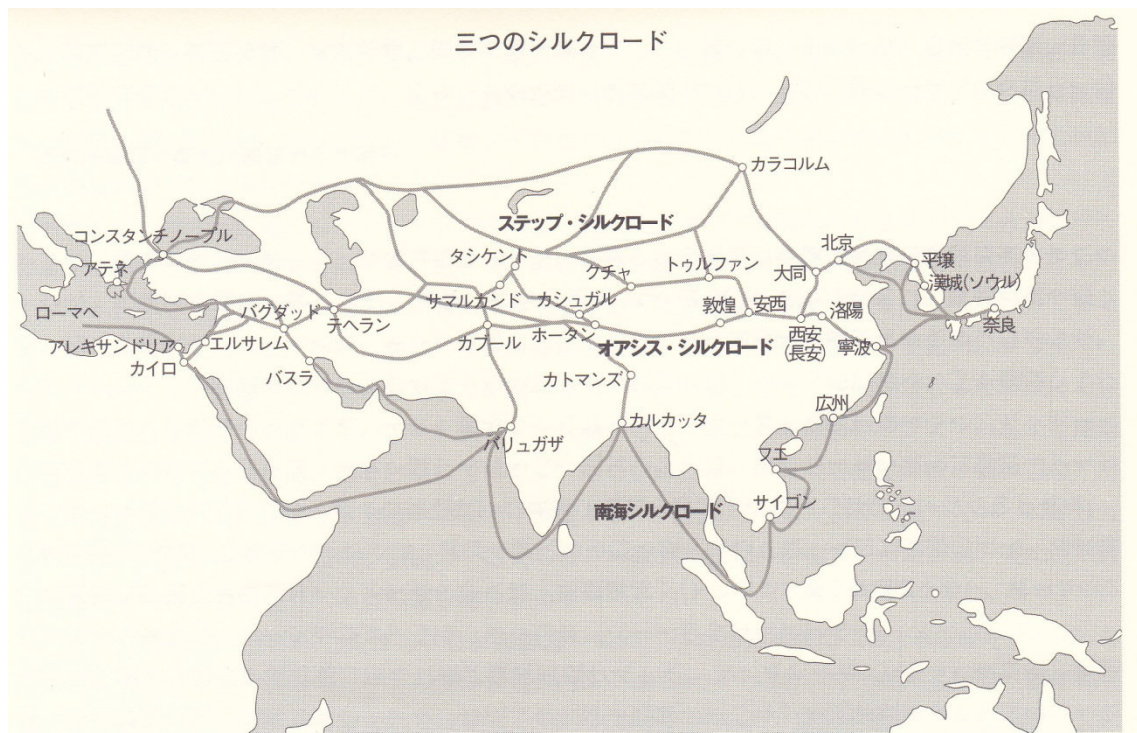
「渡島からサハリン、そしてアムールへと黒竜江を逆上り、人も住まないチタに、三年に一度のナーダムがあり、市を催す。ペルシアの商人、モンゴルの商人、遠くはギリシア、シュメールの旅商人も集う民族祭典である。各々国が異なる六千八種族、ナーダムにおいてクリルタイ（自由交易、親睦）を行い、商易の注文がある。三年後の品を定めて七日間の集いを終わる。商法の掟は厳しく、商人を襲うものは必ず地の王によって殺され、一族の者は他族の奴隷とされてしまう。よっていかに勢いのある部族といえども商人を襲うことはない。

日之本国からクリルタイに参加するには、必ず日之本將軍の許可がなくては列席することはできず、交易をすることもできない。祭典が終わったチタは、通念にわたって人は住まず、ナーダム及びクリルタイのみの土地である。波斯（スキタイ）巡礼の者はスキタイ、ギリシア、トルコ、イスラエル、シュメール、エジプトと渡って神々を巡礼するのである」

ユーラシア大陸の奥地まで、進出した安東一族ならではの情報である。彼らは船と馬によって、縦横に移動した。海のシルクロードは季節風と海流をうまく使えば、ステップ・シルクロードは駅伝駅馬の制度を使えば、われわれが想像するよりも短期間に移動できる。

安東一族は、安東水軍を組織し、青森の十三湊を拠点に、日本列島というまでもなく、シベリアの金を開発、交易していただろう。北海道、樺太、渤海、韓国、中国、台湾、インドシナ、東南アジア、さらには遠くペルシアとも交易していただろう。

現在の福建省にある泉州は、宋代には中国で広東の広州を凌駕する随一の貿易港になっていた。当時はザイトンと呼ばれ、ペルシア、アラビア商人の出入りする世界的な港湾都市で、同じく国際的な港湾都市である十三湊と緊密に結び付いていた。ペルシア、アラビア商人と安東水軍との関係は良好であり、交易が盛んであった。元代には世界最大の貿易港と称せられるようになり、海賊から商船を護るための巨大な水軍も形成されていた。



「オリエント旅状記」

『日之本文書』の編纂者である秋田孝季は「オリエント旅状記」に、ペルシアのケシム島のイラストを下記のように描いている。そして、この「旅状記」の説明を次のように展開している。日付けは西暦で一七九三年二月六日になっている。

「わが日之本国の先祖は、アラハバキ信仰の起源を求めて、日之本国の青森地域から渡島に渡り、樺太を経て山靱の地に渡り、黒龍江をさかのぼって興安嶺を通り、ブルハン湖にたどり、アルタイ平原を越えて、ギリシアに至り、多くの史談、諸遺跡に巡り合った。よってその旅状を絵に写し置くものである」

なぜ、『日之本文書』は、江戸幕府の鎖国政策のなかで、シュメールやシルクロードの情報を収集できたのか。なぜ、このような探訪が可能になったのか。江戸末期には、江戸幕府はロシアによる極東における南下政策に危機感をいだいていた。時の老中田沼意次の意思によって、北方探検が行われたのである。



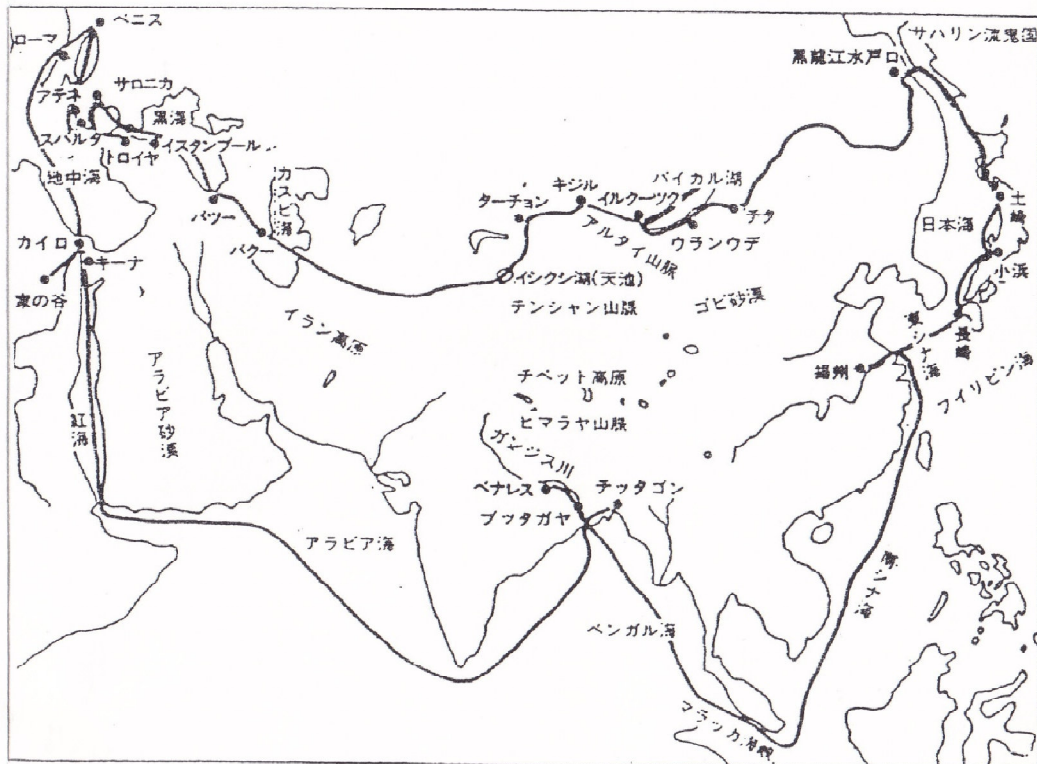
ペルシアのケシム島



興安嶺とアムール河

天明元年（一七八一）年七月、田沼意次が、三春藩藩主、秋田倩季（千季 ゆきすえ）に北方地域やユーラシアの視察を依頼し、倩季が秋田孝季に禄を与えて、この大旅程に旅立たせた。三春藩は石高こそ多くはないが、安倍一族以来の大陸交易などで蓄積した隠し財産があったようである。

秋田孝季は、四十年近くの間合計三回のユーラシア探訪、シルクロード、オリエント探訪を行っている。シベリアからステップ・シルクロードを通して、メソポタミア、エジプト、ギリシアにまで出掛けている。この間、多くの地図や書物を手に入れ、書き記した記録は数十巻にもなっている。ユーラシア探訪をおおまかに振り返ってみよう。



秋田孝季一行の「ユーラシア巡脚」ルート図

(藤本光幸「北の敗者の記録つれづれ〈4〉」『陸奥新報』平成4年9月27日付)より)

第一次ユーラシア探訪。安永三（一七七四）年、秋田孝季ら八名。土崎→サガリイ→モンゴル→満達→北京→揚州→日本。中国の古書を購入。

第二次ユーラシア探訪。安永九（一七八〇）年から天明二（一七八二）年まで。田沼意次（たぬまおきつぐ）の直命。秋田孝季ら二十二名。サガリイ→モンゴル→天山→トルコ→ギリシア→エジプト→イスラエル→シュメール→インド→西域→揚州→松浦。田沼意次への報告書もまとめる。

第三次ユーラシア探訪。天明六（一七八六）年から天明八（一七八八）年まで。幕府（田沼意次）公金三千両三春藩に賜り、孝季に下領。渡島→樺太→黒竜江→チタ→ラシュト（カスピ海）→バグダッド→黒海→イスタンブール海峡→エーゲ海→トロイア→ギリシア→エジプト→シナイ半島→紅海→インド→中国→帰途。極秘裏の偵察旅行であったが、幕府公認の大事業であった。

ホルムズ海峡のケシム島

このように秋田孝季一行は三回のユーラシア、オリエント探訪を行っているが、このうち二回目の探訪で、イスラエル、シュメール、インド、揚州という旅程を通っている。このシュメールからインドへの旅程でシュメールのチグリス、ユーフラテスの二つの大河を経て、ペルシア湾からホルムズ海峡を通して、オマーン湾に抜ける時に、ケシム島を遠方に眺めて筆写したものと思われる。二回目の探訪は、安永九（一七八〇）年から天明二（一七八二）年までで、その約十年後寛政五（一七九三）年に前記文章、絵図が書かれたのであり、年代的に大きな矛盾はない。

このケシム島はホルムズ海峡の交通の要衝にあり、古代から現代まで、ペルシア湾からオマーン湾を経てインド洋に至る中継基地として栄え、また、その支配権をめぐるしばしば争奪戦も行われたようである。軍事的拠点でもあるからだ。

ケシム島に近いペルシア本土の港町バンドル・アッバースは、有数の貿易港として栄え、香料、宝石、絹、象牙などが、ペルシア商人、インド商人などによって取引された。このホルムズ地域をイタリアの旅行家マルコポーロ、モロッコの旅行家イブン・バットゥータ、中国の旅行家鄭和などが訪れている。秋田孝季一行も安倍、安東一族が行っていたシルクロード、オリエント巡礼を江戸の末期に行ったのである。